

セイロの制作風景

インタビュー当日、大川さんは中華セイロを作って見せてくれた。



大川セイロ店製 中華セイロ
「銘」の入ったシールは「大川」のアウトライン。
「機関車にも見えるでしょ」と大川さん。



05 型を選び出す。



04 合わせ面を切り欠く。職人によってこの形は異なる。



03 高さに合わせて割る。



02 材料を吟味。



01 材料を準備。



06 型にはめ、クセをつける。



07 食用接着剤。かつては米を練ったものを使った。



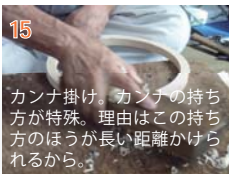
08 万力で挟んで乾燥待ち。



09 縫い止め用の桜の皮。



10 必要な大きさにカット。



15 カンナ掛け。カンナの持ち方が特殊。理由はこの持ち方のほうが長い距離かけられるから。



14 内側に板を叩きこみ、厚みを出していく。



13 続けて薄い曲物部品。



12 桜の皮で返し縫い。



11 刺し子で穴をあける。簡単そうに見えるが力がある。



16 切り欠き用の木型を当て、線を引く。



17 ノコギリで半分の高さまで切り込みを入れる。



18 小刀で削り溝を作る。



19 横棒を2本入れ、12で作った輪の中に押し込む。



20 続けて一番高さがある曲物部分。



25 完成。デパートで1万円超で売られているとのこと。



24 一番厚い部分は2センチ近くあるが、これも手縫い。



23 19の中に手際よく叩き込む。



22 一度取出し、桜の皮で縫い合わせる。スツと柔らかい紙を縫うように見えるのが職人技。素人には縫えない。



21 全身を使って19の中に押し込みクセをつける。かなりの力を要する。



26 鍋の上のせて、中に肉まんを入れ、蒸す。



27 木の香りに包まれた肉まんの完成!!

大川さんのこだわり

「手を抜こうと思えばいくらでも手を抜ける場所（製作過程）がある。でも、それをやらない。やってしまうと価格競争に巻き込まれるからだ。価格競争をせず、よいものを作る。これを親父の代から続けている。」

手を抜いていないことは消費者にも伝わる。大川セイコ店には絶え間なく注文が入ってくる。



金属製のホチキスを使った製品はホチキス部分が黒くなってしまふ。大川さんは桜の皮を使う。

ないものは作るしかない

一度は作り手がいなくなってしまうた裏ごし器用の馬毛網。奥様が作り方を調査研究し、かつての職人を探しだした。織り方の直接指導を受け、自分たちが作れるようになった。

入手が困難な良質な馬毛は、かつて馬毛を取り扱っていた業者から「引き取ってほしい」と連絡を受け、まとめて引き取った。熱意がさまざまな人と巡り合わせた。



網目の間隔は2ミリ程度。専用の編み機で1本1本手で縫い上げていく。

曲物を作る道具たち

先代から引き継いでいる道具がたくさんある。その道具は曲物同様、木で作られているものが多い。刃物にしる木にしる長年使うと擦り減っていく。道具は同じものを3つ程度交互に使う。折れてしまったとき、急に新しい道具は用意できないうえ、使い勝手は全く異なるからだ。

すり減ったカンナの台座は、すり減ったなりの使い勝手の良さがあるという。



刺し子



台座がすり減ったカンナ



木製の万力

居住地域で民芸品を探す

私は東京都在住であり、居住地域における民芸を調査するに当たり、まず中野区役所にあつた。区役所で、中野区では年に1回、中野区伝統工芸保存会が主催、中野区などが協力する「中野区伝統工芸展」を開催していると聞いた。調査時の

2011年9月にはすでに開催後であつたため、その時のパンフレットをいただいた。パンフレットに記載されている伝統工芸展出品者名簿には東京手描友禅や和人形、江戸べっ

甲などがあつたが、私は曲物を選んだ。理由は2つ、「曲物Ⅱ木の器」と連想しやすいこと、「曲物は現役で活躍」しており、柳のいう「用の美」

がそこにあるのではないかと思つたからである。伝統工芸保存協会の会長様へ連絡の上、曲物製作者へ連絡をし、インタビューのアポイントを取



つた。私が訪ねたのは、中野区で「大川セイロ店」を営んでいる大川良夫さんという方である。

曲物（まげもの）とは

「曲物」とは、杉やヒノキを1ミリ厚程度に裂き、それを円状に曲げて作った器のことである。大川さんが作る曲物は和セイロや中華セイロと呼ばれる蒸し器が中心である。



その歴史は古く、この方法により作られた水桶が広島県福山市の草戸千軒町遺跡（鎌倉〜室町時代）から出土し、広島県立歴史博物館に展示されている。

父に弟子入り

大川さんは父親が曲物職人であつたため、その二代目である。しかし、先代は親戚が営む曲物屋に弟子入りした後独立していることから、家業としてのルーツは非常に長い。曲物には型が使われ、先代が作った曲物の型は70〜80年たった今でも現役である。大川さんが先代に弟子入りしたのは高校生だったころからであり、学校に行きながら家業を手

伝うところからのスタートであつた。家業とはいへ、師弟関係には「教える」という概念がない。大川さんは先代の作る様子を見て、技術を「盗んだ」という。曲物製作には「叩く」という行為があるが、弟子入り当時の大川さんの叩き音を、テレビを見ている先代に「違う!」と一喝されたという。「テレビを見ながらも耳はこつち（弟子）を向いている。」と大川さんは笑って話してくれた。

最近感じる変化

現在、曲物製作者として大川さんが感じている変化として、3つあげられる。

①原材料や部材の確保

使用している杉やヒノキなどの材料は北海道旭川材料屋から買っている。かつては良好な部材を比較的容易に確保できた。しかし最近はその比べて材料の質が悪くなってきたという。材料の薄板は曲げられた状態で15枚程をひとくくりにした輪

の状態で届けられる。しかし、傷や欠けなどで使用できない材料の混入が多く、実際の商品に使えるのは少ない。職人によっては使えないからと返品する人もいるようであるが、そうすると材料屋が割に合わないからと取り扱い自体をやめてしまうと、そうした理由から大川さんは返品せず、使用部位に応じた材料の使い方を工夫して対応している。

大川セイロ店では「裏ごし器」の取り扱いがある。大川セイロ製の裏ごし器の網には馬の尻尾の毛が使われている。数年前、馬毛網の製造業者が廃業してしまい、その入手ができなくなつてしまった。「ないものは作るしかない」と、作り方の調査研究からはじまり、四国でかつて馬毛織りをしていたという高齢の女性を探し出した。中野区や四国の民俗資料館の協力のもと、四国その女性の女性を訪ね、大川さんの奥さんがその女性から織り方を教わつた。今では奥さんが馬毛網の作り手である。

②販売先から要求されること

大川セイロ店で作られたセイロには焼き印やシールが貼られる。かつてはその様な「銘」がないことが当然であり、百貨店と取引のある卸業者へも銘を入れずに納入していた。しかし最近は大川セイロ店の「銘」を入れてほしいという要望が増えてきた。誰が作ったかはつきりしているほうが消費者は安心して購入できるからだそうだ。焼き印やシールを使った生産者表示は本来ひと手間増えることではあるが、長年取引のある卸業者からの依頼であるため、大川さんは快く引き受けている。

③師弟関係の考え方

かつては先代や大川さん自身がつうであったように、師弟関係が当然であった。見習いのうちは給与もなく、休みも繁忙に応じて月二日程度のこともあった。数年前、取材に来た雑誌に「作り方を教えます」といった記事を掲載したところ数十件の電話連絡が来た。その内容は、「給料いくら？休日は何？」という内容が

多かったという。結局その記事を見た人から弟子入りする人はいなかった。

その後、大川さんの仕事が見たいという人から連絡が来た。その人は不定期で一年間大川さんの仕事風景を見た後、「弟子入りしたい」と言った。給料は払えない、期間はきっちり1年間だけという条件提示のもと、大川さんは弟子を受け入れた。1年後、いくつかの販売先を譲って、お弟子さんは世田谷区で独立した。今では繁忙に応じてお弟子さんに仕事を投げるなど協力関係が続いている。いずれは他の販売先もお弟子さんに引き継いでほしいと大川さんは考えている。

修理して使える

使い慣れたセイロが壊れてしまったという新聞の投稿記事を見た大川さん。自分が作ったセイロではないが、新聞社に連絡を取りその方へ修理をさせてくれと依頼したこともあるという。最近では修理以来の連絡も増えてきた。



粗悪な材料が増えてきたとはいえ、それを見逃すわけにはいかない。制作前には傷の見極め作業からはいる。



倉庫にはデッドストックのセイロが置かれている。大川さん曰く、「キャンセルされちゃった」らしい。キャンセルは職人泣かせ。



桜の皮の縫い目は、「幅」や「縫い数」を顧客の要望に合わせて縫う。



熱のこもった職人の視線で道具の説明をしてくれる大川さん。でも、お孫さんの話になると、とたんにデレデレのおじいちゃんの顔になった。



最近は「銘」を入れることが多くなってきた。このシールのデザインは仲間内のデザイナーがしてくれた。お礼はお酒1本。



先代から引き継いでいる型。70～80年経っているものもある。